

博士學位論文要約

論文題目： 『覚一本平家物語』考

氏名： 城阪 早紀

要約：

本研究が『平家物語』研究ではなく『覚一本平家物語』研究を掲げる理由は、『平家物語』という作品を論じることの限界性を自覚しているためである。周知の通り、『平家物語』には多くの伝本群が存在する。それゆえ、個々の伝本を読む前に、平家物語諸本群をどのように捉え、理解するのか、という問題がまずあり、諸本研究はその変遷や共通項を探ることが中心であった。ために、伝本間の相違は看過されてきたといえる。覚一本と延慶本が比較されることはあっても、その差異は、延慶本の本文から覚一本へ、つまり未整理の段階にあったものが語りによって物語として整えられた、という図式で把握されることが多かった。

これまでは『平家物語』という作品名に覆い隠されていたために論じられてこなかったが、覚一本と延慶本の差異に着目し、それぞれの表現の意味するところを汲み取ってゆけば、従来の図式では把握しきれない、作品としての本質に関わるほどの大きな差異を抱えているのではないだろうか。

こうした問題意識に基づいて本稿では、覚一本と延慶本を、『覚一本平家物語』（以下「覚一本」と略称）と『延慶本平家物語』（以下「延慶本」と略称）というように、一伝本としてではなく、一作品として精読し、評価する方法をとる。覚一本は、琵琶法師覚一検校の名を奥書に有する南北朝期の本文であり、後続の平家物語諸本に大きな影響を与えた。一方の延慶本は、応永年間の転写本ではあるが、最古の奥書を持ち、内容面でも依拠資料に忠実であるなど古態性を窺わせる部分が強い本文である。こうした延慶本についても、覚一本を「語り」といった視点から解放するとともに、古態を発掘するという作業から解放し、覚一本と同様に一つの物語として扱う。

覚一本と延慶本を別の物語として読み評価するためには、客観的な基準が必要である。そこで本稿では、覚一本と延慶本の異同を、次の三つの観点を組み合わせることによって検討する。

- | | |
|---------------|-----------------------|
| I（構成） | 記事の有無、または、記事の配列順序の異なり |
| II（表現） | 具体的な叙述方法や選択されることばの異なり |
| III（語句の意味・用法） | 語句の意味・用法の異なり |

このうち、I（構成）とII（表現）の異同については検討が重ねられてきたが、III（語句の意味・用法）については、異同の問題として論じられることはなかった。

I（構成）には、物語の構成と章段の構成との二つがある。物語の構成とは、平家物語全体の構成に関わる、章段単位の異同である。たとえば、その章段の有無が伝本によって分

かれる場合があり、頼朝の挙兵譚や覚一本の「祇王」が相当する。また、同じ章段を共有するものの伝本によってその配列が異なる場合も含まれる。例として建礼門院関連記事をあげることができ、これは延慶本などでは編年体で記されるが、覚一本では灌頂巻を特立して記す点で異なる。それに対して章段の構成とは、伝本間にある章段が共有されている場合の、章段ごとの構成の異同で、章段の展開を支える記事（出来事）の有無や配列のありかたが問題になる。

Ⅱ（表現）は、章段の展開を支える記事を共有している場合で、その記事の描き方の異なりを問題にする。たとえば、誰の立場に寄り添った叙述かという内容に踏み込んだものから、人物をどのように呼称するかといった比較的表面的な問題まで種々にありうる。

Ⅲ（語句の意味・用法）は、同じ語であっても、その意味・用法が伝本によって異なることを問題にするものである。伝本ごとの語句の意味・用法を確認するためには、覚一本・延慶本それぞれに全用例を精査する必要がある。これは、特定の章段や説話を抜き出して論じるという従来の方法とは異なり、作品全体を俯瞰しながら論じることができるため、客観性のある観点といえる。

これらⅠ（構成）、Ⅱ（表現）、Ⅲ（語句の意味・用法）は、どれかを個別に論じればよいというものではなく、重なり合い、相互に関わり合っているものと予想される。したがって本研究では、これらを合わせた三つの観点から覚一本と延慶本の異同を考察する。

さて本稿では、軍記物語の根幹を担い、かつ各伝本編者の裁量によるところが大きいと目される合戦譚を中心に検討する。全体として二部構成であり、各章の論旨は以下の通りである。

第一部では、合戦を構成する重要な要素である名のりに着目して、覚一本と延慶本の合戦譚の描出法の差異を考察した。

第一章では分析に先立ち、平家物語研究史の到達点と課題を整理し、本研究の立場を述べた。

第二章では、延慶本の動詞「名のる」と「名のり申す」計六二例の意味・用法を記述した。そして、合戦場面で動詞「名のる」「名のり申す」を伴って発言する事例が一三あることを確かめた。この例から、延慶本の名のりは「合戦場面で敵または味方に自身の名を告げる行為」と定義できるとした。

第三章では、前章で導いた定義によって調査を行ない、延慶本に六六例の名のりがあることを明らかにした。この六六例は、名のる人物の置かれた状況によって一〇分類できる。これまで名のりは、合戦の前や、先陣を遂げた時、敵を討ち取った時、一騎討ちの時に行われるものとされてきた。しかし本調査によって、延慶本ではこうした時だけでなく、多様な状況下での名のりが描かれていることが明らかになった。総じて延慶本は、合戦を描く型や展開を多く持ち、その戦況下での人物の行動と判断を積み重ねるという方法によって、一回性と偶然性の強い、臨場感あふれる合戦を描く方法を獲得したと結論づけた。

第四章では、覚一本の動詞「名のる」と「名のり申す」計七三例の意味・用法を記述した。第二章で論じた延慶本の動詞「名のる」と「名のり申す」の分析結果と比較をすることによって、同じ語であっても、その意味・用法は、覚一本と延慶本の間に通底する部分と、

そうでない部分があること、そして覚一本と延慶本がそれぞれの指針によって語を選択していることを明らかにした。また、覚一本の合戦場面で動詞「名のる」「名のり申す」を伴って発言する二二例から、覚一本の名のりは「合戦場面で武士が敵に自分の実名（あるいは法名）を告げる行為」と定義できるとした。

第五章では、第四章で導いた定義によって調査を行ない、覚一本には三一例の名のりがあることを明らかにした。これについて、第三章で論じた延慶本との比較から検討した。覚一本の名のり三一例は、名のる人物の置かれた状況によって五分類でき、動詞「名のる」を伴う類型的な名のりと、動詞「名のる」を伴わない類型的でない名のりに大別することができる。本章では特に類型的な名のりを取り上げ、表現と状況の両方が類型に貫かれていることを確認した。そして覚一本は、同じ表現・同じ状況の名のりを物語中で繰り返すことによって、これから起こるであろう展開を、物語を読む者にも聞く者にも予想させることで、その脳裡に実体感を伴う合戦を映し出す方法を獲得したと結論づけた。

以上第一部では、覚一本と延慶本の名のりを検討した。その用例数を比べると、覚一本（三一例）は延慶本（六六例）の半数以下である。その理由として、定義の異なりがあげられるが、この定義の異なりは合戦の叙述法の差異に通じるものと考えられる。すなわち、延慶本の名のりは味方に対して行うものも含んでいる。そこには源氏武者同士の駆け引きや心理戦が描かれており、平家を攻め落とす源氏方の動向を丹念に追う姿勢が看取される。対する覚一本は、名のる相手を敵に限定することで、敵と味方とが対峙した戦場の緊張感を描いていた。つまり覚一本は、源氏方の動向を一元化することによって、源氏と平家の合戦に焦点を当てた合戦を構成していたといえる。

第二部では、第一部で論じた名のりを含む合戦譚について、具体的に検討した。第六章と第七章では木曾義仲にまつわる合戦譚を、第八章と第九章では源平合戦を取り上げた。これは、源義経に滅ぼされる、義仲と平家一門との描き分けを明らかにするためである。

第六章では、従来、諸本間の異同が論じられてこなかった「法住寺合戦」を取り上げた。延慶本は義仲を、清盛と同じ悪行人であり、平家一門と同様に頼朝によって滅ぼされる者として造型している。一方の覚一本は、義仲を悪行人ではなく「をこ者」として造型していた。それは、巻一から重ねてきた清盛の悪行が、義仲の悪行によって相対的に軽くなることのないよう意図したものと考えられる。

第七章では、従来、諸本間の異同がほとんどないとされてきた「木曾最期」を取り上げた。延慶本での義仲は、自らが望んだ通り、今井兼平と共に存分に戦い、今井が供をすることによって、「一所」の死を遂げる。しかし覚一本の義仲は、今井と共に「最後のいくさ」をして「一所」で「討死」することを望んだが、どちらも叶わず、「いふかひなき奴原」に討たれるという、無念な最期を遂げた人物として描かれていることを指摘した。

第八章では、一谷合戦より「一二之懸」を取り上げた。「一二之懸」の構図を読み解くと、延慶本が〈熊谷〉と〈平山〉という二人の源氏武者の先陣争いに焦点を当てると対し、覚一本は、〈源氏〉熊谷直実と〈平家〉平盛嗣の対立を焦点としていた。この構図の違いは、第一部で明らかにした、延慶本が源氏武者の動向を多元的に捉えるのに対し、覚一本は源氏軍の動きを一元化することによって源平の合戦を構成するという結論と符号する。覚一本と延慶本が、別の構図で合戦を描いているということは、それぞれの編者たちが物語を

新たな視座から捉え直し、独自の物語として紡ぎだした結果と考えることができる。

第九章では、壇浦合戦より「能登殿最期」を取り上げた。延慶本は教経の最期を、義経に敗れても戦いをやめず、無益な殺生を続けるものとして描いていた。ところが覚一本で敗走するのは義経のほうであり、その最期は、教経を生捕りにしようとする安芸兄弟を、教経が「したがへ」たとするので、最後まで源氏に屈することのないものとして描いていた。覚一本での教経の最期は類型から逸脱するものであるが、直後に続く知盛の入水は、乳母子と「一所」で死ぬという覚一本の型に則ったものである。覚一本はここでも類型と、類型から逸脱するものとの双方を使い分けていた。

以上の考察から得られた結論は、次の三点に要約することができる。

一点目は、同じ語句であっても、その意味するところや用法が異なることを、覚一本と延慶本の異同として定義したことである。分析した語数は十分とは言えないが、覚一本のみならず、延慶本にあっても、それぞれの指針によって語を選択していることを明らかにした。

二点目は、類型表現についてである。覚一本の類型表現は「語り」の証左とされてきたが、その意義は、語りとの関係によらずとも説明できる。覚一本は類型表現を、合戦を華々しいものと描くためだけでなく、時に攻撃を間接的なものとして描くためにも使用していた。また一方では、積み上げてきた類型を崩すことによって、教経の最期を比類なきものとして描いてもいる。つまり、覚一本は、自らの物語に沿った合戦譚を構成するために、類型とその類型から逸脱するものとを自在に操っていたといえる。

三点目は、平家物語という作品と、覚一本・延慶本という諸本との関係についてである。これまで覚一本は語りとの関係によって、延慶本はその古態性によって評価されてきた。そのため、覚一本と延慶本を比較する場合、覚一本を基軸とする時には、不整合であったものが文学としての達成を遂げる過程を読み取り、また延慶本を基軸とするときには、覚一本では消し去られてしまった編纂の痕跡と読みとる方向で論じられることが多かった。

しかし本研究によって、雑纂的な性格とされてきた延慶本にあっても、一つの合戦像を結んでいることが明らかになった。それは、源氏武者の動向に注意を払い、どのように源氏軍が平家方を滅ぼしたのかに焦点を当てて合戦譚を構成してゆくというものである。一方の覚一本は、源氏方の動向を一元化し、源氏と平家の対立に焦点を当てるといって、延慶本とは異なる合戦譚を構成していた。このことは、覚一本が義仲と平家一門とを対等に扱わないことから読みとれる。義仲の最期を無念なものとして描く一方で、平家滅亡の場面では、義仲の遂げられなかった最期を、教経と知盛が遂げたとすることで、平家の滅びに収斂させるかたちで物語を展開していた。

総じて本研究では、延慶本の一語一語に即した読解によって新たな読みを開拓し、その対比から覚一本を精読することによって、覚一本と延慶本が、各編者らの構想に基づいた、別の物語であることを明らかにした。これは、従来の『平家物語』という、諸本群を束ねた一作品を想定する観点からは達することのできなかつた結論といえる。延慶本は、源氏が平家を滅ぼしてゆく様を主軸に据えた平家物語であり、覚一本は、平家が源氏に滅ぼされてゆく様を主軸に据えた平家物語であった。

主な参考文献：

- ・山田 孝雄『平家物語考』勉誠社、一九六八年。(国語調査委員会編『平家物語につきての研究』前篇、文部省、一九一一年の複製本)
- ・高橋 貞一『平家物語諸本の研究』富山房、一九四三年。
- ・渥美かをる『平家物語の基礎的研究』三省堂、一九六二年。
- ・小西 甚一「本文批判の基本的態度」『東京教育大学文学部紀要』七二、一九六九年三月。
- ・水原 一 『平家物語の形成』加藤中道館、一九七一年。
- ・犬井 善壽『『平家物語』の「語り」と「読み」一口承と書承の概念規定から』『軍記と語り物』一一、一九七四年一〇月。
- ・武久 堅 『平家物語成立過程考』桜楓社、一九八六年。
- ・梶原 正昭『平家物語』岩波書店、一九九二年。
- ・小林 美和『語りの中世文芸一牙を磨く象のように』和泉書院、一九九四年。
- ・佐伯 真一『平家物語遡源』若草書房、一九九六年。
- ・早川 厚一『平家物語を読む―成立の謎をさぐる』和泉書院、二〇〇〇年。
- ・村上 學 『語り物文学の表現構造―軍記物語・幸若舞・古浄瑠璃を通じて』風間書房、二〇〇〇年。
- ・池田 敬子『軍記と室町物語』清文堂出版、二〇〇一年。
- ・松尾 葦江『軍記物語原論』笠間書院、二〇〇八年。
- ・原田 敦史『平家物語の文学史』東京大学出版会、二〇一二年。
- ・千明 守 『平家物語屋代本とその周辺』おうふう、二〇一三年。
- ・櫻井 陽子『『平家物語』本文考』汲古書院、二〇一三年。
- ・麻原 美子『平家物語世界の創成』勉誠出版、二〇一四年。